



三大和歌集について

万葉集 奈良時代

- ・ 現存する和歌集のなかで最古・
- ・ 20 巻 約 4500 首
- ・ 大友家持が編集に大きく関わった
- ・ 雑歌、相聞、挽歌の三大部立の分類を基本としている。
- ・ 歌風は 丈夫ぶり

古今和歌集 平安時代

- ・ 最初の勅撰和歌集(醍醐天皇の勅令)
- ・ 20 巻 約 1100 首
- ・ 撰者は 紀貫之を主としている
- ・ 春夏秋冬の季節や歌の内容（恋歌、離別歌など）で分類される。
- ・ 技巧的、理知的な歌が多い。
- ・ 歌風は 手弱女ぶり
- ・ 僧正遍照 在原業平 小野小町 文屋康秀 喜撰法師 大友黒主の六人を六歌仙という。

新古今和歌集 鎌倉時代

- ・ 八番目の勅撰和歌集
- ・ 20 巻 約 2000 首
- ・ 1201 年に勅令が下がり、1204 年に一応の完成。
- ・ 撰者は 藤原定家 寂蓮 など
- ・ 古今和歌集の理念を重視しつつ、更に幽玄・有心の理念のもとに観念的な美の世界をかい
ている

勅撰和歌集は
古今和歌集 後撰和歌集
拾遺和歌集 後拾遺和歌集
金葉和歌集 詞花和歌集
千載和歌集 新古今和歌集
だよ

〈万葉集〉

天皇、蒲生野に遊獵（みかり）するときに額田王のつくる歌

あかねさす紫野行き野守は見ずや君が袖振る

意味：紫野のなかを行き、標野の中を行って、野守は見えていないでしょうか（みえていますよね）あなたが私に袖を振っている様子を。

解説 遊獵⇒かり。天皇の行動を敬うために「み」をつけて読む・

標野⇒立ち入り禁止の標を張った野

あかねさす⇒枕詞(歌の調子を整えることば)

野守⇒野の見張り番

袖振る⇒愛情表現

見ずや⇒見えていないでしょうか、いや、見てますよね。

（参考）皇太子の答へし御歌

紫のにのへる妹を憎くあらば人妻ゆえに我恋ひめやも

軽皇子、安騎の野に宿らせるときに柿本朝臣人麻呂が作る歌

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

意味：東の野に陽炎が立つのが見えて、振り返ってみると月は西に傾いていた

解説 かぎろひ⇒ひのひかり。

軽皇子⇒のちの文武天皇

山上憶良臣、宴をまかる歌

憶良らは今はまからむ 子泣くらむ それその母も我を待つらむぞ

意味： 私憶良めは、今はもうお暇いたしましょう。子が泣いているでしょう、
ああ、その子の母も私の帰りを待っているでしょう。

解説 罷宴…宴会を終えること。 まかる…退席

宴を終えるために、「子ども、妻」が待っているから、という事を述べ、
おどけた感じでおさめたものか、と言われる。

憶良「ら」⇒謙遜の意を表す意

まからむ⇒意志 子泣くらむ、待つらむ⇒現在推量

*憶良、家族想い説

25 日に作る歌一首（大友家持）

うらうらに照れる春日にひばりあがり心悲しもひとりし思へば

意味：うららかに照っている春の日中にひばりが舞い上がり、心が悲しい。一人で思っているの

解説 上の句：春の風景 下の句：作者の情

⇒春はプラスなイメージが多いが、下の句によって逆にもの悲しさをうむ
春愁三首の一首。

春はのどかに鶯がさえずっている。悲しみの心は歌でなければ払いのけるのが難しいだけ。そこでこれを詠み、心の屈託を晴らそうと試みた。

〈古今和歌集〉

春立ちける日、よめる 紀貫之

袖ひちてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風やとくらむ

意味：(夏には)袖が水に浸って手ですくった水が今は冷たく凍っているようだが、立春の今日の風が解かしているだろうか。

解説 むすびし⇒両手で掬う 風やとくらむ⇒風が解かしているだろうか
ひちて⇒袖が水に浸かってしまう 春立⇒立春。暦上の春
袖ひちてむすびし水の⇒夏 凍れるを⇒冬 春た(ry⇒春

渚院にて桜を見て詠める 在原業平

世の中にたえ桜のなかりせば春の心はのどけからまし

意味：世の中に全く桜が無かったならば、春の私の心はきっと穏やかだっただろうに。

解説 渚院⇒文徳天皇の第一皇子の邸宅

たへて～なし⇒全く～ない

～せば 一まし⇒～ならば、一なのに（反実仮想）

惟喬親王をはげましている

唐土にて、月を見て、詠みける 阿倍仲麻呂

天の原振りさけみれば 春日なる三笠の山にいでし月かも

〈新古今和歌集〉

男ども詩を作りて歌に合はせ侍りしに、水郷の春望といふことを 後鳥羽上皇

見渡せば山もと霞む水無瀬川 タベは秋となに思ひけむ

題知らず 藤原俊成

誰かまた花橘に思ひ出でむ我も昔の人となりねば

西行法師勸めて、百首詠ませ侍りけるに

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

主が力尽きたって。

明日になったら完全版ができるみたい。